

8人のJDRストーリー ～現場にかける思い～



災害現場や感染症の流行地域に、いち早く駆け付ける国際緊急援助隊（JDR）。
は——。現場の最前線に立つ隊員8人に話を聞いた。

業務調整員（感染症対策チーム）



公益社団法人青年海外協力協会
JICA駒ヶ根青年海外協力隊訓練所
訓練1班

大森 貫二さん

派遣実績

2016年 コンゴ民主共和国黄熱

2 011年から青年海外協力隊としてアフリカ・ベナンで活動していた私は、帰国後に青年海外協力協会の方から声を掛けていただき、JDR事務局で働くことに。今年、コンゴ民主共和国で黄熱が流行した際には、感染症対策チームの業務調整員を務めました。行きの飛行機の中では、検査試薬などの冷蔵品・冷凍品の温度管理に苦戦しましたが、無事に全ての資機材を現地に届け、停滞していた検体の検査が再開されたときは苦勞が吹き飛びました。ホテルからの移動は原則車で、警備員の同行も必須でしたので、安全かつ円滑に活動できるように、各隊員に合わせた行動計画を整理した上で翌日の指示出しを行いました。こうした経験は、派遣後に異動した今の仕事にも生かされていると感じます。

看護師（医療チーム）



東京医科歯科大学医学部附属病院・
周産女性診療科
副看護師長

高村 ゆ希さん

派遣実績

2015年 ネパール地震
2013年 フィリピン台風
2009年 インドネシア地震

医 療チーム2次隊のチーフナースを務めた昨年のネパール地震では、活動中に大きな余震が発生し、手術や診療を中止せざるを得ない状況となりました。自分の身や仲間の安全を守ること、被災した方々に手を差し伸べること。どれも大切で、はかりには掛けられないのに、限られた時間で対応を決断しなければならない葛藤を抱きました。麻酔中だった子どもの手術は中止となり、安全な場所で治療が受けられるように医師が書いた書面を渡しました。気掛かりでしたが、2日後にその子どもと病院で再会することができたのです。親御さんから、「ちゃんと手術してもらえたよ。ありがとう」と声を掛けてもらった瞬間、治療を受けられるように“つなぐ”役割の一端を担えたことを実感しました。

海上保安官（救助チーム）



海上保安庁総務部
国際・危機管理官付課長補佐

稲葉 健人さん

派遣実績

2015年 ネパール地震
2004年 スマトラ島沖地震（タイ）
2004年 モロッコ地震
2003年 アルジェリア地震

初 の派遣となったのは、2003年のアルジェリア地震です。捜索現場から、がれきの山を歩いて基地に戻っていたとき、同僚の隊員が突然「声が聞こえた!」と叫びました。がれきの下に耳を澄ますと、それは小さいながらも間違いなく人の声。みんな疲れが一気に吹き飛び、活動を再開しました。その後、トルコチームも加わり、全員で生存者を救出できた感動は今でも忘れられません。私が大切にしていることは、被災国の立場に立ち、被災者に寄り添うことです。ご遺体の取り扱いや被災者感情は日本と異なることが多く、現場に日本式をそのまま持ち込むのは、単なる押し付けとなる場合もあります。被災国に入ったら、「できることを最大限やる!」という気持ちが大事だと思います。

警察官（救助チーム）



警視庁警備部災害対策課
特殊救助隊指導班長

清水 邦彦さん

派遣実績

2015年 ネパール地震
2011年 ニュージーランド地震

2 011年のニュージーランド地震の際には中隊長として派遣され、指揮官として現地で調整を行う難しさを感じました。到着直後は、既に現地入りしていた海外チームが同じ現場での活動を快く受け入れてくれませんでした。日本チームの丁寧で繊細な活動を目の当たりにするにつれて次第に友好的になり、資器材の貸し借りなどでお互いに協力するようになりました。「全員救出する」という思いが一つになったことを強く感じた瞬間でした。東日本大震災のときには、この派遣の経験を生かして、応援に駆け付けてくれた韓国チームの救助犬の調整を担当しました。現在の職場は、特殊救助隊という救助専門の職種です。JDRで学んだ手法を全国の警察に伝えています。

医師（感染症対策チーム）



国立感染症研究所
ウイルス第一部
部長

西條 政幸さん

派遣実績

2016年 コンゴ民主共和国黄熱

1 995年から1年間、JICA専門家としてアフリカ・ザンビアの感染症対策に従事しました。この経験でアフリカでの感染症が身近なものに感じられたこともあり、感染症対策チームへの登録を決めました。今年、コンゴ民主共和国に派遣された際に担当したのは、黄熱の検体検査とその診断です。事前に支援内容を検討し実施するだけでなく、現地でもその時々状況把握しながら臨機応変にニーズに対応することの重要性を学びました。また、現地との関係者との交流が深まったこともうれしい成果です。情けは人のためならず——。JDRは支援を必要とする人々のためであることはもちろん、日本の感染症対策が強化され、海外との関係が深まることから、私たち自身のためにもなると信じています。

理学療法士（医療チーム）



東名古屋病院
リハビリテーション科
副理学療法士長

浅野 直也さん

派遣実績

2015年 ネパール地震

東 日本大震災の医療救護活動に関わったことを機に、自分の経験を海外でも生かせないかと考えるようになり、JDRに登録しました。昨年のネパール地震では、医療チーム1次隊として現地に入りました。被災者の方々はテントやトラックの荷台での生活を強いられており、余震への不安も続いていました。こうした中、診療エリアの設営や受け付け、松葉づえの指導などさまざまな活動を行いました。現地では松葉づえを使う習慣がなく、言葉も通じないため、医師や看護師、業務調整員、通訳の方とも連携を図りながら活動しました。再診に訪れた患者の笑顔は今でも印象に残っています。異文化の中で、被災者の身体的な面だけでなく心のケアにも関われることに、JDRの意義を感じています。

構造評価専門家（救助チーム）



株式会社構造コンサル東日本
代表取締役

高橋 勇さん

派遣実績

2015年 ネパール地震

救 助隊が崩れ残った建物付近に入るための安全を確保するには、構造技術者の助言が欠かせません。2010年に日本の救助チームが「ヘビー」級に認定されたことを機に、JICAからの要請を受けてチームに加わりました。初の派遣となった昨年のネパール地震では、捜索・救助を行う隊員と共に現地に入りました。現場はレンガ造りの建築物が多く、もし崩壊すると、内部に生存可能な空間がなくなることが予想されたため、崩壊しそうな建物のモニタリングや、基地となる宿舎の被災度判定を実施しました。隊員は生存者の救出に必死になり、自身の安全が見えなくなりがちです。そこで、私たちが一歩引いて、活動現場の安全をいかに確保するかを進行する必要があると感じています。

消防隊員（救助チーム）



東京消防庁荏原消防署
署長

萩森 義男さん

派遣実績

2015年 ネパール地震

昨 年のネパール地震では中隊長を任せられました。私が最優先したことは、消防と共にチームを組む警察や海上保安庁と一体となって総合力を発揮するための“チームビルディング”です。隊員もその必要性を理解しており、行きの飛行機の中では寝る間も惜しんで、お互いの名前を呼び合いながら機材リストの確認や情報交換を行っていました。その積極的な姿に、「これならやれる」と確信しました。捜索・救助現場は、余震による二次災害の危険、37度を超える外気温、砂埃などが付きまとう劣悪な環境でしたが、士気旺盛な隊員と共に任務を遂行しました。帰国時には、現場の指揮官からお礼としてネパール国旗をいただきました。国際貢献に関わったことをうれしく思います。